

日本語母語話者による スペイン語における対照焦点の知覚

高澤美由紀

スペイン語は統語機能の観点からは比較的語順が自由とされる言語ではあるが、情報機能もかなりの部分で語順に制約を与えていると先行研究において指摘されている。その中で、主語 S が目的語 O に先行し、O が前置詞句 P に先行するのが無標の語順であるが、疑問に対する答えの要点の部分が S や O に相当する場合、中立アクセントが中立焦点である S や O に置かれるようにするために、VOS、VOPS、VPO という 3 種類の有標の語順を必要とすることがあるという言及がある。一方、語順とともにイントネーションも情報機能の影響を受けることが報告されている。

以上のことから、無標の語順である SVOP の場合に、音調句全体が焦点となる広焦点と焦点になっている要素と競合関係にある他の要素を対照させて前者が正しい要素であると主張する対照焦点の 2 つが、それぞれどのようなイントネーションで実現されるのかについて、イベリア半島出身のスペイン語母語話者男性 1 名による朗読音声 (Lola mira la torre blanca en la plaza. 「ロラは広場で白い塔を見る。」) を用いてパイロット実験を試みた。その結果、広焦点の場合、そのイントネーション型は、 $L^* + H$ $L^* + H$ $H^* + L$ $L^* + H$ $L^* L\%$ となり、発話の最初の F0 ピークが一番高く、2 番目、3 番目とその高さが段階的に低くなっていくというダウステップに近い傾向を示した。一方、対象焦点の場合、広焦点よりも各発話で音調パターンにばらつきが見られるものの、イントネーション型は、 $L^* + H$ $L^* H^* + L$ $L^* + H$ $L\% L^* L\%$ と記述され、ターゲット語句の後ろにポーズをとることにより、本来 1 つのメロディーグループである発話を 2 つのメロディーグループに分ける傾向が見られた。また、ターゲット語句直

前の mira において F0 値の抑制が観察され、ターゲット語句は発話全体における F0 最大値で実現された。この結果を踏まえ、広焦点と対照焦点の差異として実現されるイントネーション型が知覚にどのような影響を与えているのか、つまり、1) ターゲット語句はどの程度の高さで焦点があると聴取されるのか、2) ターゲット語句直前の動詞 mira における F0 値の抑制は対照焦点の聴取に重要であるかという 2 つの点に注目し、日本語母語話者を対象とし、合成音声を用いた聴取実験を行った。今回の実験では、F0 値がどのように聴取に影響するのかを調べることを目的としているため、インテンシティの値の影響が少ない広焦点で発話された音声を用い、Praat に備えられている、PSOLA (Pitch Synchronous OverLap Add) と呼ばれるアルゴリズムによる音声合成プログラムを用い、この広焦点で発話された音声の F0 形状を平滑化し、ターゲット語句直前の mira の mi の F0 値、及びターゲット語句に含まれ、対照焦点では発話全体における F0 最大値を示す blanca の ca の F0 値を変化させることにより作成した 21 個の刺激音にオリジナルの発話を平滑化した 1 個の刺激音を加えた計 22 個の刺激音をランダムに並べ替え、これを 1 セットとし、5 セットを第 2 外国語としてスペイン語を学ぶ大学 1 年生に聴取してもらい、強調があるかどうか、またあるとすればどこに強調があるかを回答してもらった。

その結果、日本語母語話者にとってターゲット語句の直前に生起する F0 値の抑制ではなく、ターゲット語句の直後に生起する F0 値の抑制 (22Hz 以上) がターゲット語句に焦点が置かれていると聴取するキューとなっているのではないかと推測される結果となった。つまり、日本語母語話者にとって、ある要素の右側に位置するもののピッチが高ければ強調があり、低くなればその要素に強調があると知覚されると推測された。